



# プロバイダ管理クラスタを追加します

## Astra Control Service

NetApp  
April 24, 2024

# 目次

プロバイダ管理クラスタを追加します .....	1
パブリックプロバイダが管理するクラスタをAstra Control Serviceに追加します .....	1
プロバイダが管理するプライベートクラスタをAstra Control Serviceに追加します .....	6

# プロバイダ管理クラスタを追加します

## パブリックプロバイダが管理するクラスタをAstra Control Serviceに追加します

クラウド環境のセットアップが完了したら、Kubernetesクラスタを作成してAstra Control Serviceに追加できます。

- [Kubernetes クラスタを作成](#)
- [Astra Control Serviceにクラスタを追加](#)
- [\[デフォルトのストレージクラスを変更する\]](#)

### Kubernetes クラスタを作成

まだクラスタがない場合は、を満たすクラスタを作成できます ["Amazon Elastic Kubernetes Service \(EKS\) 用のAstra制御サービスの要件"](#)。まだクラスタがない場合は、を満たすクラスタを作成できます ["Google Kubernetes Engine \(GKE\) 用 Astra Control Service の要件"](#)。まだクラスタがない場合は、を満たすクラスタを作成できます ["Azure NetApp Files を備えた Azure Kubernetes Service \(AKS\) の Astra 制御サービスの要件"](#) または ["Azure 管理ディスクを使用する Azure Kubernetes Service \(AKS\) の Astra 制御サービスの要件"](#)。



Astra Control Serviceは、Azure Active Directory (Azure AD) を使用して認証とID管理を行うAKSクラスタをサポートします。クラスタを作成するときは、の手順に従ってください ["公式ドキュメント"](#) をクリックして、Azure ADを使用するようにクラスタを設定してください。AKSで管理されるAzure AD統合の要件をクラスタが満たしていることを確認する必要があります。

### Astra Control Serviceにクラスタを追加

Astra Control Service にログインしたら、最初にクラスタの管理を開始します。Astra Control Serviceにクラスタを追加する前に、特定のタスクを実行し、クラスタが一定の要件を満たしていることを確認する必要があります。

Azure Kubernetes ServiceクラスタとGoogle Kubernetes Engineクラスタを管理する場合、Astra Control Provisionerのインストールとライフサイクル管理には次の2つのオプションがあることに注意してください。

- Astra Control Serviceを使用すると、Astra Control Provisionerのライフサイクルを自動的に管理できます。そのためには、Astra Control Serviceで管理するクラスタでAstra Tridentがインストールされておらず、Astra Control Provisionerが有効になっていないことを確認してください。この場合、クラスタの管理を開始すると、Astra Control ServiceによってAstra Control Provisionerが自動的に有効になり、Astra Control Provisionerのアップグレードは自動的に処理されます。
- Astra Control Provisionerのライフサイクルは自分で管理できます。これを行うには、Astra Control Serviceでクラスタを管理する前に、クラスタでAstra Control Provisionerを有効にします。この場合、Astra Control ServiceはAstra Control Provisionerがすでに有効になっていることを検出し、再インストールやAstra Control Provisionerのアップグレードの管理は行いません。を参照してください ["Astra Control Provisionerを有効にする"](#) では、Astra Control Provisionerを有効にします。

Astra Control ServiceでAmazon Web Servicesクラスタを管理する場合、Astra Control Provisionerでのみ使用

できるストレージバックエンドが必要な場合は、Astra Control Serviceで管理する前に、クラスタでAstra Control Provisionerを手動で有効にする必要があります。を参照してください ["Astra Control Provisionerを有効にする"](#) をクリックし、Astra Control Provisionerを有効にします。

作業を開始する前に

#### Amazon Web Services の

- クラスタを作成したIAMユーザのクレデンシャルを含むJSONファイルが必要です。 ["IAMユーザを作成する方法を説明します"](#)。
- Amazon FSx for NetApp ONTAPにはAstra Controlプロビジョニングツールが必要です。EKSクラスタのストレージバックエンドとしてAmazon FSx for NetApp ONTAPを使用する予定の場合は、 ["EKSクラスタ要件"](#)。
- （オプション）を指定する必要がある場合 `kubectl` クラスタの作成者ではない他のIAMユーザにクラスタにアクセスするためのコマンドアクセスについては、の手順を参照してください ["Amazon EKSでクラスタを作成したあと、他のIAMユーザとロールにアクセスを提供するにはどうすればよいですか？"](#)。
- NetApp Cloud Volumes ONTAP をストレージバックエンドとして使用する場合は、Amazon Web Servicesと連携するようにCloud Volumes ONTAP を設定する必要があります。Cloud Volumes ONTAP を参照してください ["セットアップのドキュメント"](#)。

#### Microsoft Azure

- サービスプリンシパルの作成時に、Azure CLIからの出力を含むJSONファイルが必要です。 ["サービスプリンシパルの設定方法について説明します"](#)。

JSON ファイルに追加していない場合は、Azure サブスクリプション ID も必要になります。

- NetApp Cloud Volumes ONTAP をストレージバックエンドとして使用する場合は、Microsoft Azure と連携するようにCloud Volumes ONTAP を設定する必要があります。Cloud Volumes ONTAP を参照してください ["セットアップのドキュメント"](#)。

#### Google Cloud

- 必要な権限を持つサービスアカウントのサービスアカウントキーファイルが必要です。 ["サービスアカウントの設定方法について説明します"](#)。
- NetApp Cloud Volumes ONTAP をストレージバックエンドとして使用する場合は、Google Cloudと連携するようにCloud Volumes ONTAP を設定する必要があります。Cloud Volumes ONTAP を参照してください ["セットアップのドキュメント"](#)。

#### 手順

1. （オプション）Amazon EKSクラスタを追加する場合、またはAstra Control Provisionerのインストールとアップグレードを自分で管理する場合は、クラスタでAstra Control Provisionerを有効にします。を参照してください ["Astra Control Provisionerを有効にする"](#) を参照してください。

2. ブラウザでAstra Control Service Web UIを開きます。

3. ダッシュボードで、 `* Kubernetes クラスタの管理 *` を選択します。

プロンプトに従ってクラスタを追加します。

4. プロバイダ：クラウドプロバイダを選択し、新しいクラウドインスタンスを作成するために必要なクレデンシャルを入力するか、使用する既存のクラウドインスタンスを選択します。

5. \* Amazon Web Services \* : JSON ファイルをアップロードするか、クリップボードからその JSON ファイルの内容を貼り付けて、Amazon Web Services IAM ユーザアカウントの詳細を指定します。

JSON ファイルに、クラスタを作成した IAM ユーザのクレデンシャルを含める必要があります。

6. \* Microsoft Azure \* : JSON ファイルをアップロードするか、クリップボードからその JSON ファイルの内容を貼り付けて、Azure サービスプリンシパルの詳細を指定します。

JSON ファイルに、サービスプリンシパルの作成時に Azure CLI からの出力が含まれている必要があります。サブスクリプション ID を含めることで、Astra に自動的に追加されるようにすることもできます。ID が必要な場合は、JSON の指定後に手動で ID を入力する必要があります。

7. \* Google Cloud Platform \* : ファイルをアップロードするか、クリップボードからコンテンツを貼り付けて、サービスアカウントのキーファイルを提供します。

Astra Control Service は、サービスアカウントを使用して、Google Kubernetes Engine で実行されているクラスタを検出します。

8. その他 : このタブは自己管理クラスタでのみ使用できます。

- a. クラウドインスタンス名 : このクラスタを追加するときに作成される新しいクラウドインスタンスの名前を指定します。の詳細を確認してください ["クラウドインスタンス"](#)。

- b. 「\* 次へ \*」を選択します。

Astra Control Service に、クラスタのリストが表示されます。

- c. クラスタ : Astra Control Service に追加するクラスタをリストから選択します。



クラスタのリストから選択する場合は、\* Eligibility \* 列に注意してください。クラスタが「ineligible」または「partially eligible」の場合は、ステータスにカーソルを合わせて、そのクラスタに問題があるかどうかを確認します。たとえば、クラスタにワーカーノードがないことがわかります。

- d. 「\* 次へ \*」を選択します。

- e. (オプション) \* Storage \* : 必要に応じて、このクラスタに導入された Kubernetes アプリケーションでデフォルトで使用するストレージクラスを選択します。

9. クラスタの新しいデフォルトのストレージクラスを選択するには、\*[新しいデフォルトのストレージクラスを割り当てる]\*チェックボックスを有効にします。

10. 新しいデフォルトのストレージクラスをリストから選択します。

各クラウドプロバイダのストレージサービスには、コスト、パフォーマンス、耐障害性に関する次の情報が表示されます。



- Cloud Volumes Service for Google Cloud：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報
- Google Persistent Disk：コスト、パフォーマンス、耐障害性に関する情報は提供されません
- Azure NetApp Files：パフォーマンスと耐障害性に関する情報
- Azure Managed Disks：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報は提供されません
- Amazon Elastic Block Store：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報がない
- Amazon FSX for NetApp ONTAP：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報は提供されません
- NetApp Cloud Volumes ONTAP：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報は提供されません

ストレージクラスごとに、次のいずれかのサービスを利用できます。

- ["Cloud Volumes Service for Google Cloud"](#)
- ["Google Persistent Disk のことです"](#)
  - ["Azure NetApp Files の特長"](#)
  - ["Azure で管理されるディスク"](#)
  - ["Amazon Elastic Block Store"](#)
  - ["NetApp ONTAP 対応の Amazon FSX"](#)
  - ["NetApp Cloud Volumes ONTAP の略"](#)

の詳細を確認してください ["Amazon Web Services クラスタのストレージクラス"](#)。の詳細を確認してください ["AKS クラスタのストレージクラス"](#)。の詳細を確認してください ["GKE クラスタのストレージクラス"](#)。

- 「\* 次へ \*」を選択します。
- 確認と承認：構成の詳細を確認します。
- [Add]\*を選択して、Astra Control Serviceにクラスタを追加します。

## 結果

このクラウドプロバイダ用に最初に追加したクラスタである場合、Astra Control Serviceは、対象となるクラスタで実行されているアプリケーションのバックアップ用に、クラウドプロバイダ用のオブジェクトストアを作成します。（このクラウドプロバイダに対して後続のクラスタを追加した場合、オブジェクトストアは作成されません）。デフォルトのストレージクラスを指定した場合は、指定したデフォルトのストレージクラスがAstra Control Serviceによって設定されます。Amazon Web ServicesまたはGoogle Cloud Platformで管理されるクラスタの場合、Astra Control Serviceはクラスタにも管理者アカウントを作成します。この処理には数分かかることがあります。

## デフォルトのストレージクラスを変更する

クラスタのデフォルトのストレージクラスは変更できます。

### Astra Controlを使用してデフォルトのストレージクラスを変更する

クラスタのデフォルトのストレージクラスは、Astra Control内から変更できます。以前にインストールしたストレージバックエンドサービスをクラスタで使用している場合は、このメソッドを使用してデフォルトのストレージクラスを変更できない可能性があります（\*デフォルトに設定\*アクションは選択できません）。この場合は、を実行できます [\[コマンドラインを使用してデフォルトのストレージクラスを変更します\]](#)。

#### 手順

1. Astra Control Service UI で、[\* Clusters] を選択します。
2. [\* Clusters]ページで、変更するクラスタを選択します。
3. [\* ストレージ\*] タブを選択します。
4. 「ストレージクラス」カテゴリを選択します。
5. デフォルトとして設定するストレージクラスの\* Actions \*メニューを選択します。
6. 「デフォルトに設定」を選択します。

### コマンドラインを使用してデフォルトのストレージクラスを変更します

Kubernetesコマンドを使用してクラスタのデフォルトのストレージクラスを変更することができます。この方法は、クラスタの構成に関係なく機能します。

#### 手順

1. Kubernetesクラスタにログインします。
2. クラスタ内のストレージクラスを表示します。

```
kubectl get storageclass
```

3. デフォルトのストレージクラスからデフォルトの指定を削除する。<SC\_NAME> をストレージクラスの名前に置き換えます。

```
kubectl patch storageclass <SC_NAME> -p '{"metadata":  
{"annotations":{"storageclass.kubernetes.io/is-default-  
class":"false"}}}'
```

4. 別のストレージクラスをデフォルトとしてマークします。<SC\_NAME> をストレージクラスの名前に置き換えます。

```
kubectl patch storageclass <SC_NAME> -p '{"metadata":  
{"annotations":{"storageclass.kubernetes.io/is-default-class":"true"}}}'
```

5. 新しいデフォルトストレージクラスを確認します。

```
kubectl get storageclass
```

## プロバイダが管理するプライベートクラスタをAstra Control Serviceに追加します

Astra Control Serviceを使用して、Google Kubernetes Engine (GKE) のプライベートクラスタを管理できます。ここでは、プライベートAKSまたはOpenShiftクラスタがすでに作成されており、リモートからアクセスするための安全な方法が用意されていることを前提としています。プライベートAKSまたはOpenShiftクラスタの作成とアクセスの詳細については、次のドキュメントを参照してください。

- ["プライベートAKSクラスタに関するAzureのドキュメント"](#)
- ["プライベートOpenShiftクラスタに関するAzureのドキュメント"](#)

Astra Control Serviceを使用して、AKSでプライベートAzure Kubernetes Service (AKS) クラスタとプライベートRed Hat OpenShiftクラスタを管理できます。ここでは、プライベートAKSまたはOpenShiftクラスタがすでに作成されており、リモートからアクセスするための安全な方法が用意されていることを前提としています。プライベートAKSまたはOpenShiftクラスタの作成とアクセスの詳細については、次のドキュメントを参照してください。

- ["プライベートAKSクラスタに関するAzureのドキュメント"](#)
- ["プライベートOpenShiftクラスタに関するAzureのドキュメント"](#)

Astra Control Serviceを使用して、プライベートAmazon Elastic Kubernetes Service (EKS) クラスタを管理できます。ここで説明する手順では、プライベートEKSクラスタがすでに作成されており、リモートからアクセスするためのセキュアな方法が用意されていることを前提としています。プライベートEKSクラスタの作成とアクセスの詳細については、を参照してください ["Amazon EKSのドキュメント"](#)。

Astra Control Serviceにプライベートクラスタを追加するには、次のタスクを実行する必要があります。

1. [Astra Connectorのインストール](#)
2. [\[永続的ストレージをセットアップする\]](#)
3. [プロバイダが管理するプライベートクラスタをAstra Control Serviceに追加](#)

### Astra Connectorのインストール

プライベートクラスタを追加する前に、Astra Controlがクラスタと通信できるように、クラスタにAstra Connectorをインストールする必要があります。を参照してください ["Kubernetesネイティブではないワークフローで管理されるプライベートクラスタ用に、以前のバージョンのAstra Connectorをインストール"](#) 手順については、を参照し



## 永続的ストレージをセットアップする

クラスタに永続的ストレージを設定してください。永続的ストレージの設定の詳細については、『[Get Started](#)』ドキュメントを参照してください。

- ["Azure NetApp Files を使用して Microsoft Azure をセットアップする"](#)
- ["Azure で管理されているディスクを使用して Microsoft Azure をセットアップする"](#)
- ["Amazon Web Servicesをセットアップする"](#)
- ["Google Cloud をセットアップします"](#)

## プロバイダが管理するプライベートクラスタを**Astra Control Service**に追加

プライベートクラスタをAstra Control Serviceに追加できるようになりました。

Azure Kubernetes ServiceクラスタとGoogle Kubernetes Engineクラスタを管理する場合、Astra Control Provisionerのインストールとライフサイクル管理には次の2つのオプションがあることに注意してください。

- Astra Control Serviceを使用すると、Astra Control Provisionerのライフサイクルを自動的に管理できます。そのためには、Astra Control Serviceで管理するクラスタでAstra Tridentがインストールされておらず、Astra Control Provisionerが有効になっていないことを確認してください。この場合、クラスタの管理を開始すると、Astra Control ServiceによってAstra Control Provisionerが自動的に有効になり、Astra Control Provisionerのアップグレードは自動的に処理されます。
- Astra Control Provisionerのライフサイクルは自分で管理できます。これを行うには、Astra Control Serviceでクラスタを管理する前に、クラスタでAstra Control Provisionerを有効にします。この場合、Astra Control ServiceはAstra Control Provisionerがすでに有効になっていることを検出し、再インストールやAstra Control Provisionerのアップグレードの管理は行いません。を参照してください ["Astra Control Provisionerを有効にする"](#) では、Astra Control Provisionerを有効にします。

Astra Control ServiceでAmazon Web Servicesクラスタを管理する場合、Astra Control Provisionerでのみ使用できるストレージバックエンドが必要な場合は、Astra Control Serviceで管理する前に、クラスタでAstra Control Provisionerを手動で有効にする必要があります。を参照してください ["Astra Control Provisionerを有効にする"](#) をクリックし、Astra Control Provisionerを有効にします。

### Amazon Web Services の

- クラスタを作成したIAMユーザのクレデンシャルを含むJSONファイルが必要です。"[IAMユーザを作成する方法を説明します](#)"。
- Amazon FSx for NetApp ONTAPにはAstra Controlプロビジョニングツールが必要です。EKSクラスタのストレージバックエンドとしてAmazon FSx for NetApp ONTAPを使用する予定の場合は、"[EKSクラスタ要件](#)"。
- (オプション) を指定する必要がある場合 `kubectl` クラスタの作成者ではない他のIAMユーザにクラスタにアクセスするためのコマンドアクセスについては、[手順を参照してください](#) "[Amazon EKSでクラスタを作成したあと、他のIAMユーザとロールにアクセスを提供するにはどうすればよいですか?](#)"。
- NetApp Cloud Volumes ONTAP をストレージバックエンドとして使用する場合は、Amazon Web Servicesと連携するようにCloud Volumes ONTAP を設定する必要があります。Cloud Volumes ONTAP を参照してください "[セットアップのドキュメント](#)"。

### Microsoft Azure

- サービスプリンシパルの作成時に、Azure CLIからの出力を含むJSONファイルが必要です。"[サービスプリンシパルの設定方法について説明します](#)"。

JSON ファイルに追加していない場合は、Azure サブスクリプション ID も必要になります。

- NetApp Cloud Volumes ONTAP をストレージバックエンドとして使用する場合は、Microsoft Azure と連携するようにCloud Volumes ONTAP を設定する必要があります。Cloud Volumes ONTAP を参照してください "[セットアップのドキュメント](#)"。

### Google Cloud

- 必要な権限を持つサービスアカウントのサービスアカウントキーファイルが必要です。"[サービスアカウントの設定方法について説明します](#)"。
- クラスタがプライベートの場合は、[を参照してください](#) "[許可されたネットワーク](#)" Astra Control Service の IP アドレスを許可する必要があります。

52.188.218.166-32

- NetApp Cloud Volumes ONTAP をストレージバックエンドとして使用する場合は、Google Cloudと連携するようにCloud Volumes ONTAP を設定する必要があります。Cloud Volumes ONTAP を参照してください "[セットアップのドキュメント](#)"。

### 手順

1. (オプション) Amazon EKSクラスタを追加する場合、またはAstra Control Provisionerのインストールとアップグレードを自分で管理する場合は、クラスタでAstra Control Provisionerを有効にします。[を参照してください](#) "[Astra Control Provisionerを有効にする](#)" を参照してください。

2. ブラウザでAstra Control Service Web UIを開きます。

3. ダッシュボードで、\* Kubernetes クラスタの管理 \* を選択します。

プロンプトに従ってクラスタを追加します。

4. プロバイダ：クラウドプロバイダを選択し、新しいクラウドインスタンスを作成するために必要なクレデ

ンシャルを入力するか、使用する既存のクラウドインスタンスを選択します。

5. \* Amazon Web Services \* : JSON ファイルをアップロードするか、クリップボードからその JSON ファイルの内容を貼り付けて、Amazon Web Services IAM ユーザアカウントの詳細を指定します。

JSON ファイルに、クラスタを作成した IAM ユーザのクレデンシャルを含める必要があります。

6. \* Microsoft Azure \* : JSON ファイルをアップロードするか、クリップボードからその JSON ファイルの内容を貼り付けて、Azure サービスプリンシパルの詳細を指定します。

JSON ファイルに、サービスプリンシパルの作成時に Azure CLI からの出力が含まれている必要があります。サブスクリプション ID を含めることで、Astra に自動的に追加されるようにすることもできます。ID が必要な場合は、JSON の指定後に手動で ID を入力する必要があります。

7. \* Google Cloud Platform \* : ファイルをアップロードするか、クリップボードからコンテンツを貼り付けて、サービスアカウントのキーファイルを提供します。

Astra Control Service は、サービスアカウントを使用して、Google Kubernetes Engine で実行されているクラスタを検出します。

8. その他 : このタブは自己管理クラスタでのみ使用できます。

- a. クラウドインスタンス名 : このクラスタを追加するときに作成される新しいクラウドインスタンスの名前を指定します。の詳細を確認してください ["クラウドインスタンス"](#)。

- b. 「\* 次へ \*」を選択します。

Astra Control Service に、クラスタのリストが表示されます。

- c. クラスタ : Astra Control Service に追加するクラスタをリストから選択します。



クラスタのリストから選択する場合は、\* Eligibility \* 列に注意してください。クラスタが「ineligible」または「partially eligible」の場合は、ステータスにカーソルを合わせて、そのクラスタに問題があるかどうかを確認します。たとえば、クラスタにワーカーノードがないことがわかります。

9. 「\* 次へ \*」を選択します。

10. (オプション) \* Storage \* : 必要に応じて、このクラスタに導入された Kubernetes アプリケーションでデフォルトで使用するストレージクラスを選択します。

- a. クラスタの新しいデフォルトのストレージクラスを選択するには、\*[新しいデフォルトのストレージクラスを割り当てる]\*チェックボックスを有効にします。

- b. 新しいデフォルトのストレージクラスをリストから選択します。

各クラウドプロバイダのストレージサービスには、コスト、パフォーマンス、耐障害性に関する次の情報が表示されます。



- Cloud Volumes Service for Google Cloud：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報
- Google Persistent Disk：コスト、パフォーマンス、耐障害性に関する情報は提供されません
- Azure NetApp Files：パフォーマンスと耐障害性に関する情報
- Azure Managed Disks：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報は提供されません
- Amazon Elastic Block Store：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報がない
- Amazon FSX for NetApp ONTAP：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報は提供されません
- NetApp Cloud Volumes ONTAP：価格、パフォーマンス、耐障害性に関する情報は提供されません

ストレージクラスごとに、次のいずれかのサービスを利用できます。

- ["Cloud Volumes Service for Google Cloud"](#)
- ["Google Persistent Disk のことです"](#)
- ["Azure NetApp Files の特長"](#)
- ["Azure で管理されるディスク"](#)
- ["Amazon Elastic Block Store"](#)
- ["NetApp ONTAP 対応の Amazon FSX"](#)
- ["NetApp Cloud Volumes ONTAP の略"](#)

の詳細を確認してください ["Amazon Web Services クラスタのストレージクラス"](#)。の詳細を確認してください ["AKS クラスタのストレージクラス"](#)。の詳細を確認してください ["GKE クラスタのストレージクラス"](#)。

- c. 「\* 次へ \*」を選択します。
- d. 確認と承認：構成の詳細を確認します。
- e. [Add]\*を選択して、Astra Control Serviceにクラスタを追加します。

## 結果

このクラウドプロバイダ用に最初に追加したクラスタである場合、Astra Control Serviceは、対象となるクラスタで実行されているアプリケーションのバックアップ用に、クラウドプロバイダ用のオブジェクトストアを作成します。（このクラウドプロバイダに対して後続のクラスタを追加した場合、オブジェクトストアは作成されません）。デフォルトのストレージクラスを指定した場合は、指定したデフォルトのストレージクラスがAstra Control Serviceによって設定されます。Amazon Web ServicesまたはGoogle Cloud Platformで管理されるクラスタの場合、Astra Control Serviceはクラスタにも管理者アカウントを作成します。この処理には数分かかることがあります。

## デフォルトのストレージクラスを変更する

クラスタのデフォルトのストレージクラスは変更できます。

### Astra Controlを使用してデフォルトのストレージクラスを変更する

クラスタのデフォルトのストレージクラスは、Astra Control内から変更できます。以前にインストールしたストレージバックエンドサービスをクラスタで使用している場合は、このメソッドを使用してデフォルトのストレージクラスを変更できない可能性があります（\*デフォルトに設定\*アクションは選択できません）。この場合は、を実行できます [\[コマンドラインを使用してデフォルトのストレージクラスを変更します\]](#)。

#### 手順

1. Astra Control Service UI で、[\* Clusters] を選択します。
2. [\* Clusters] ページで、変更するクラスタを選択します。
3. [\* ストレージ\*] タブを選択します。
4. 「ストレージクラス」カテゴリを選択します。
5. デフォルトとして設定するストレージクラスの\* Actions \*メニューを選択します。
6. 「デフォルトに設定」を選択します。

### コマンドラインを使用してデフォルトのストレージクラスを変更します

Kubernetesコマンドを使用してクラスタのデフォルトのストレージクラスを変更することができます。この方法は、クラスタの構成に関係なく機能します。

#### 手順

1. Kubernetesクラスタにログインします。
2. クラスタ内のストレージクラスを表示します。

```
kubectl get storageclass
```

3. デフォルトのストレージクラスからデフォルトの指定を削除する。<SC\_NAME> をストレージクラスの名前に置き換えます。

```
kubectl patch storageclass <SC_NAME> -p '{"metadata": {"annotations":{"storageclass.kubernetes.io/is-default-class":"false"}}}'
```

4. 別のストレージクラスをデフォルトとしてマークします。<SC\_NAME> をストレージクラスの名前に置き換えます。

```
kubectl patch storageclass <SC_NAME> -p '{"metadata": {"annotations":{"storageclass.kubernetes.io/is-default-class":"true"}}}'
```

5. 新しいデフォルトストレージクラスを確認します。

```
kubectl get storageclass
```

## 著作権に関する情報

Copyright © 2024 NetApp, Inc. All Rights Reserved. Printed in the U.S. このドキュメントは著作権によって保護されています。著作権所有者の書面による事前承諾がある場合を除き、画像媒体、電子媒体、および写真複写、記録媒体、テープ媒体、電子検索システムへの組み込みを含む機械媒体など、いかなる形式および方法による複製も禁止します。

ネットアップの著作物から派生したソフトウェアは、次に示す使用許諾条項および免責条項の対象となります。

このソフトウェアは、ネットアップによって「現状のまま」提供されています。ネットアップは明示的な保証、または商品性および特定目的に対する適合性の暗示的保証を含み、かつこれに限定されないいかなる暗示的な保証も行いません。ネットアップは、代替品または代替サービスの調達、使用不能、データ損失、利益損失、業務中断を含み、かつこれに限定されない、このソフトウェアの使用により生じたすべての直接的損害、間接的損害、偶発的損害、特別損害、懲罰的損害、必然的損害の発生に対して、損失の発生の可能性が通知されていたとしても、その発生理由、根拠とする責任論、契約の有無、厳格責任、不法行為（過失またはそうでない場合を含む）にかかわらず、一切の責任を負いません。

ネットアップは、ここに記載されているすべての製品に対する変更を随時、予告なく行う権利を保有します。ネットアップによる明示的な書面による合意がある場合を除き、ここに記載されている製品の使用により生じる責任および義務に対して、ネットアップは責任を負いません。この製品の使用または購入は、ネットアップの特許権、商標権、または他の知的所有権に基づくライセンスの供与とはみなされません。

このマニュアルに記載されている製品は、1つ以上の米国特許、その他の国の特許、および出願中の特許によって保護されている場合があります。

権利の制限について：政府による使用、複製、開示は、DFARS 252.227-7013（2014年2月）およびFAR 5252.227-19（2007年12月）のRights in Technical Data -Noncommercial Items（技術データ - 非商用品目に関する諸権利）条項の(b)(3)項、に規定された制限が適用されます。

本書に含まれるデータは商用製品および / または商用サービス（FAR 2.101の定義に基づく）に関係し、データの所有権はNetApp, Inc.にあります。本契約に基づき提供されるすべてのネットアップの技術データおよびコンピュータ ソフトウェアは、商用目的であり、私費のみで開発されたものです。米国政府は本データに対し、非独占的かつ移転およびサブライセンス不可で、全世界を対象とする取り消し不能の制限付き使用权を有し、本データの提供の根拠となった米国政府契約に関連し、当該契約の裏付けとする場合にのみ本データを使用できます。前述の場合を除き、NetApp, Inc.の書面による許可を事前に得ることなく、本データを使用、開示、転載、改変するほか、上演または展示することはできません。国防総省にかかる米国政府のデータ使用权については、DFARS 252.227-7015(b)項（2014年2月）で定められた権利のみが認められます。

## 商標に関する情報

NetApp、NetAppのロゴ、<http://www.netapp.com/TM>に記載されているマークは、NetApp, Inc.の商標です。その他の会社名と製品名は、それを所有する各社の商標である場合があります。